

陸軍衛生制度史 (前段)

荒木 肇

■衛生制度を見る

防衛医科大学校の開校は1974 (昭和49)年のことでした。明治の建軍当初こそ、陸海軍はそれぞれ独自の学校を設けて医官を自前で養成しましたが、その歴史は短いものになりました。近代教育制度が整うことで、大学医学部や医学専門学校の在校生や医師免許をもつ卒業生からの採用を始めることになったからです。以後、教育制度が整うにしたがい、現役軍医は帝国大学医学部、官立医科大学、官立医学専門学校などから採用します。戦時動員に備えて有資格者には、兵役中に予備軍医としての素養を与えていきました。薬剤官もその重要性を認められて、やはり大学薬学部や専門学校からの採用が整えられます。

看護官については、看護卒、看護下士から始まりました。徴兵検査で指定され衛戍病院 (師団管区ごと) に1つ)に入営し教育を受け病院等で

勤務する人と、他兵科での基礎訓練を受けて選抜されて病院で研修を受けて隊付になった人もいます。後に衛生兵となって少佐まで進む道もできました。

▲軍医ノ養成所ニシテ講習所ニアラズ

最初の軍医学校は1870 (明治3)年の大阪軍事病院内軍医学校でした。オランダ人を教官にして外科学や赤十字社規則などを教えました。1872 (明治5)年には東京に軍隊医事行政を司る軍医寮と、軍医教育のための軍医学舎が置かれます。このときの職員令によると、ドイツ人ホフマンが教師として招かれ、他に医正1、教官3、助教15、上等幹事2 (軍医)、下等幹事3 (下士) が定員です。医正というのはおそらく上長官 (佐官) にあたり、教官は高等官、助教は判任官相当の一般教育担当者と考えられます。

生徒の志願者は17歳以上25歳までで、入学試験は作文、尺牘 (せきとく)、算術、漢学、本邦歴史及万国歴史、羅旬 (ラテン) 語、英語、仏語、独語・希臘 (ギリシャ) 語のうちから1つというものです。尺牘というのは手紙文のこと、当時は目的別の手紙を書かせることで教養や知識が

試せると考えられていました。外国語は何でも良く、理系の科目が算術しかないというところが時代を表しています。

ところが、翌明治6年、学舎は軍医学校と改称され、入試科目は作文以下歴史までに加えて、窮理学 (物理)、舎蜜学 (化学)、解剖学、生理学、病理学、薬性学、内科学、外科学と増えました。諸語学は同じです。ただし、医学的な素養は厳しく査定しないで良いという但し書きが付いています。

生徒への教授科目は、軍隊医学独自の軍陣衛生学、陸軍病院竝 (ならびに) 屯営医務、撰兵学、軍陣繃帯術並野営医則、陸軍病院内実験などが明示されます。徴兵検査にあたる「撰兵学」も軍医官ならではの医学です。この入試科目の内容からは、医学に志す若者たちがすでに私塾などで、医学的知識も得ていたことがうかがわれます。

軍医学校史にも、「前記軍医学校ハ軍医ノ養成所ニシテ軍医官ノ講習所ニアラズ」と明記されています。その頃、石黒忠憲 (いしぐろ・ただのり) (1845~1941年) 2等軍医正 (少佐相当官) は、軍医学校で普

通医学を教える必要は無いと主張しました。いよいよ教育が進んでいる文部省管下の医学校在校生から軍医生徒を採用すべし、陸軍に入ってから軍事医学を教えれば良いということです。これが容れられて、1877 (明治10)年3月に在校生の卒業と同時に学校は閉鎖されました。

▲「医制」が出される

1874 (明治7)年のことでした。内務省は近代的な医療制度を確立する為に「医制」といわれる大方針を立てました。

- (1) 西洋医学の採用
- (2) 医師養成と免許制度
- (3) 医療機関の設立と規制
- (4) 薬事管理と医薬分業
- (5) 公共衛生の整備

これによって改革が行われましたが、近世江戸時代の漢方医は大きな打撃を受けました。江戸時代には医師は誰でもがなれたと言っては語弊がありますが、全国的な医師免許はありませんでした。漢方の医書を読み、高名な開業医の下で修業を積み、そうして医師になりました。また、各大家家には士分の医官がおりましたが、この人たちは修業のために京や江戸、長崎などで学びます。最高

に権威があったのは、やはり幕府の奥医師でした。彼らは「医学館」といわれた漢方医学の殿堂で学び、家業を継承しました。

面白いのは「学医は匙がまわらぬ」という言い方があり、知識だけ（学医）では臨床が上手いわけではない、薬匙の加減は勘と経験が大切だという考え方があったことです。幕末だけでなく、江戸中期以降は民間医師からの抜擢もありました。

薬については、城下町や大きな宿場町なら「生薬屋」という漢方や蘭方の薬種を扱う店があり、医師はそれらを調合して患者に投与します。医師は薬剤師を兼ねていました。また、病院といわれるような施設は少なく、維新後には陸軍病院と海軍病院、維新後は廃藩置県までは藩立病院などがあつたようです。

1875（明治8）年には医学教育は内務省衛生局の所管になりました。

▲大学東校

あまり知られていないことです。が、幕末には洋式の幕府陸海軍がありました。西洋医学を学ぶ幕府立の「医学所」という学校もあります。また洋書調所という外国情報を扱い、

外国語教育を行う組織もありました。幕府最後の時期に医学所の中心になっていたのは松本良順（1832～1907年）です。高名な佐倉順天堂（千葉県）を創った蘭方医佐藤泰然の次男に生まれました。幕府奥医師松本家に婿入りします。父親同士が蘭方医学の親しい仲間でした。良順という名前は維新後に「順」に改めました。

松本は1857（安政4）年に、幕府がオランダから教官を招いた海軍伝習隊（第2次）の一人として長崎に向かいました。そこでオランダ海軍2等軍医ポンペ（1829～1908年）と出会います。彼はユトレヒト軍医学校卒の誠実な青年軍医でした。松本は彼と協力して長崎に養生所（病院）と医学所（医師養成学校）を設けます。そこではポンペの頑固なまでの体系的医学にこだわ

る教育が行われました。これがそれまでのシーボルト（1796～1866年）の教えを受けた世代の医師とは大きな違いです。松本は急逝した緒方洪庵（1810～1863年）の後任として医学所の頭取になります。緒方洪庵は偉大な業績（私塾「適塾」で多くの俊

才を世に出します）で有名ですが、その晩年幕府奥医師となり医学所を預かります。興味深いのは、後任の松本が緒方の外国語学中心の教育方針を覆し、医学修業最優先の場にしたことです。

わが近代陸軍の父である大村益次郎も適塾で学んだ医師でしたが、その高い語学能力と総合力から兵学の大家となりました。福沢諭吉も同じです。多くの塾生は医学の修業専一と考えてはいなかったし、緒方洪庵もそれで良しとしていました。それは間違っている、語学に励むのは医学書を読むためだというのが松本順でした。幕府崩壊後、医学所は洋書調所の後身である開成学校と合体して大学東校となりました。

明治になっても医学所は全国医学の先進校でした。オランダより進んでいたドイツ医学の採用もすぐに行います。この医学所は官立東京医学校となり、後に東京大学医学部となりました（帝国大学となったのは1886年の「帝国大学令」による）。

▲医学学校の軍医生徒

1881（明治14）年に東京医学校在学学生が軍医生徒に採用されました。この時の8名が第1回生でした。

小池正直（1854～1914年）、谷口謙（1856～1929年）、菊池常三郎（1855～1921年）、賀古鶴所（1855～1931年）などの軍医生徒が同年に卒業します。

彼らと並んで、同期生には卒業後に採用された森林太郎（鴎外1862～1922年）という名前もあります。彼らのほとんどが各藩の医官の息子であり、いわば家業を継いだといえるでしょう。

小池は1888（明治21）年にドイツで内科を学び、谷口も菊池も86年にドイツ留学し、谷口は病理学、菊池は外科を、賀古は小池と同行し、耳鼻咽喉科の研究を行います。森は皆より早く84年にドイツに赴き、衛生学（栄養学を含む）を学びます。彼らの世代こそ、日清戦争では中佐級で兵站軍医部長などを務め、日露戦争では大佐・少将級になって軍医部長などで戦功を挙げた人たちです。

さて、1876（明治9）年から1885（同18）年までの東京大学卒業生数をまとめてみます。法学部62名、医学部215名、理学部149名、文学部47名となっています。

1881年の卒業生数だけ見ると医学部は39名です（諸説あり30名という数字もあり）。うち8名が陸軍軍医となっています。いかに陸軍が貴重な人材を獲得したかが分かります。

▲軍医部の官名

1872（明治5）年1月20日に「陸軍職制」が出されます。そこには1等・陸軍卿、2等・大將以下13等・軍曹まで階級名がありました。同年10月には改正されて、1等・元帥、2等・大將以下14等・伍長までが記録にあります。ただし、これは「職名」であって「官階」ではありません。翌明治6年5月には元帥が削除され、大尉までを奏任官とする制度が決まりました（後に少尉以上）。ここで「武官官等表」が出されました。軍医部には3等・軍医総監（少将相当）、4等・軍医監（大佐同）、5等・1等軍医正（中佐同）、6等・2等軍医正（少佐同）、7等・軍医（1・2等に分かれる、大尉同）、8等・軍医副（前同、中尉相当官）、9等・軍医補（少尉同）がおかれます。

薬剤官もこのとき、4等・薬剤監（大佐相当）、5等・1等薬剤正（中佐同）、6等・2等薬剤正（少佐同）、7等・薬剤官（大尉同）、8等・薬

劑官副（中尉同）、9等・薬剤官補（少尉同）とあります。興味深いのは当時の機動力の主力だった軍馬の管理です。馬医部（のちに獣医部）には、6等・少佐相当の馬医正、7等・大尉同馬医、8等・中尉同馬医副、9等・少尉同馬医副があります。

建軍当初は「何事によらずフランス式を採用する」が大方針です。当時の陸軍軍制に大きな影響をもつたのは幕府留學生の経歴をもつ西周（1829～1897年）でした。西は石見国津和野藩の藩医の家に生まれ（森林太郎・鵬外の藩医森家から出て藩医西家を継ぎました）、幕臣に登用されオランダへ留学します。この人は多才で有能、兵部省、陸軍省で腕をふるいましたが、フランスの陸軍軍医部について調査しました。

フランス軍では軍医部は監督部の下にあり、そのトップはメデイスン・インスペクトールという大佐相当官で西は「軍医監」という訳語を創ります。ところが、軍医たちは監督部などに管理されてたまるものかというわけです。監督部は上長官（佐官）以上ですが、後に経理部となるものでした。ちなみに経理を扱う尉官級

は「軍吏部」といいました。

第一、維新以来の功業者であり、西洋医学の大元松本順が大佐で良いのかという意見も高まり、なんとメデイスン・インスペクトール・ゼネラルという官名を創り、それに「軍医総監」という訳語を当てました。軍医総監は少将相当であり、軍医監は大佐同ということになりました。



初代軍医総監 松本 順

はなりませんでした。医学部出身第一期生の森林太郎たちは、卒業してすぐに陸軍軍医副（中尉相当）に任官したわけです。

▲「べろ出し軍医」

軍医部のマークは白い盾の中に赤い一文字がありました。実は赤十字を採用しようとしたところ、1871（明治4）年、太政官から「十字とは耶穌（キリスト教）の印」だとクレームが付きます。そこで石黒忠恵がいずれ赤十字に加盟したら縦線を加えればいいと赤一文字を制定しました。

明治4年制定「御親兵歩兵隊附軍医正服」（中尉相当） 赤い帽子が御親兵（近衛）



また、「軍医将校」とし、官名も軍医大佐、軍医少尉とできないかという意見も出たようです。ところが、これには兵科将校たちから異見が出ます。「将校」というのは「軍隊指揮権」をもつ高等武官であり、医官に武力行使を任とする軍隊を指揮できるのかというのです。戦時動員がされると「衛生隊（担架中隊や搬送中隊などがある）」という軍隊を編成しますが、その指揮官にも兵科将校が補任されました。こうしたことから医官の階級呼称も将校と同じに

軍医たちは帽子の正章にも、左ひじにもこれを付けます。口から舌を出しているようだといわれ、「べろ出し軍医」とからかわれることになりました。なお、薬剤官は赤線が無く白い盾だけでした。

なお、1875（明治8）年には肋骨服として知られる軍衣が指定さ

紫紺色の鎮台歩兵隊附軍医正服



れますが、その略帽（通常勤務に使う帽子）には軍医部の定色である深緑が巻かれます。

明治8年制定の肋骨服の軍医軍服
（大尉相当）



赤十字への改定は1886（明治19）年のことでした。ジュネーブ条約に加盟したわが国は赤十字を使うことが可能になりました。



看護卒の医療背囊
に付く赤一文字

★写真はいずれも『陸軍軍医学校五十年史』、1936（昭和11）年、陸軍軍医学校からです。